

1. 活動のテーマ、問いを考える

【テーマ】

自然に触れて自分たちで料理をしてみよう

【問いを考える】

じゃがいもってどこで できているのかな？

じゃがいもでクッキングできないかな？

2. 活動スケジュール

2025年5月～2026年1月

3. 環境設定と探究活動の内容

【環境設定】

じゃがいも掘り体験、軍手、野菜の苗、電子レンジ

【探究活動の内容】

ジャガイモ掘り体験を通して、自分たちが普段食べているものはどこから来て、どのようにして作られているのかを知り、自分たちも作ってみたいという気持ちを育む。

4. 活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり

じゃがいも掘り体験では、畑にジャガイモが埋まっていることに驚き、さらに「じゃがいもってこんな色なんだね」「ピンクのじゃがいもだったら、すぐに見つけられたのにね」「ピンクのジャガイモ見たことある？」「ないけど、〇〇先生(English講師)ならピンクのジャガイモ知ってるかもね」と見たこと・感じたこと・想像したことを話していた。保育者も「ジャガイモっていろいろな色があるのかもね」と思いを巡らせるよう関わっていた。そこで、野菜を自分たちで育てたり、体験を通してジャガイモを使って何か作れないか調べ、考え、「ポテトサラダを作りたい」ということになった。近隣の商店街に材料を購入したり、電子レンジを使って全て子どもたちが工程に携われるよう保育者が会議で意見を交わし、工夫をした。野菜が苦手な子ども「じぶんでつくったポテトサラダはおいしかったからママにもおしえてあげる」と意気込んでいた。育てていた野菜は「お水だよ。のどかわいたでしょう？」「いっぱい飲んでね」と、水やりをしてお世話したが、猛暑の中オクラのみが育ち、保育者がカットして、においをかいだり、断面を見せたところ、「切ったカタチがおもしろいから、スタンプしたい」と野菜スタンプにしてあそんでいた。



5. 振り返り

今回の活動では、給食で食べていた野菜の興味から始まり、観察・推測・実際の体験へとつながっていった。子どもたちはジャガイモが畑に埋まっておき、探しにくさから、色に注目して自分なりに思いを巡らせていた。畑で何が育つのかを考え、保育者をお願いして野菜の苗を購入し、テラスのプランターに入れて世話をしていた。猛暑のため、なかなか野菜が育たず、収穫は10月になってしまったが、断面のカタチをおもしろがり、制作へと展開し、楽しんでいた。さらに興味は「自分たちで作ってみたい」とクッキングを提案され、保育者と一緒にどんなものを作るのか？また作れるのか？そのための工程は全て子どもたちが関われるよう会議で意見とアイデアを出し合い、保育者が配慮しながら、「ポテトサラダ」を作ることになった。八百屋さんでは、ジャガイモ掘り体験をした思い出を語った子どももおり、子どもたちの中で活動の「つづき」を楽しむ様子が見られた。電子レンジを使うと、ジャガイモが熟を通した証拠に「においが変わった」ことに気づいて、驚く姿も見られた。野菜が普段苦手な子ども「食べれた」という達成感には、単に喜びだけでなく、「自分でできた」という自信にもつながっているように思う。遊びや活動の中で自然と「色」に興味をもったり、自分のことのように世話をしたり、どんなものを作るのか、何が必要なのか「考えてみる」という学びのサイクルが生まれることを、今回の活動で実感した。今後も、子どもたちが自然の仕組みや育み方、自身の身体をつくることへの活動を取り入れていきたい。同時に、自分の体だけでなく、友だちや保育者や周りの生き物の体も大切にできるような活動へと広げ、命や身体への尊重の心を育てていきたい。

1. 活動のテーマ、問いを考える

【テーマ】

自然に触れて自分たちで料理をしてみよう

【問いを考える】

フルーツってなにがあるのかな？

りんごは赤いアイスになるのかな？

2. 活動スケジュール

2025年5月～2025年8月

3. 環境設定と探究活動の内容

【環境設定】

野菜の苗、アイスパック、水、くだものシロップ

【探究活動の内容】

ジャガイモ掘り体験を通して、自分たちが普段食べているものはどこから来て、どのようにして作られているのかを知り、自分たちも作ってみたいという気持ちから、野菜だけでなく果物に興味がつり、自分たちで大好きな果物のアイスを作ってみたいということになった。色やにおいや感触も探究し興味関心を育む。

4. 活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり

野菜の苗づくりは、オクラとピーマンだけがプランターで元気に育っている。水やりをしながら、「おやさいのほかにさ、くだものも つちのなかにいるよね?」「なにがあるのかな?」「わたし りんごがすき」「わたし ぶどう」「みかん」保育者が話を聞いていると「お野菜が暑かったからお水たくさん飲めて嬉しかったって」と水やりの様子を伝えると「あついからさ、アイス食べたいんじゃない?」「アイス食べたい」「りんご?ぶどう?」という会話から、「アイスを作ろう」という話に展開した。そこで、子どもたちからあがった果物のシロップとアイスパックと水を用意して、シロップのにおいを嗅ぎながら「これはりんご」「りんごジュースみたい」と水のペットボトルにたらし、シェイクしてまぜる。アイスパックに入った状態でもんでみたり、色が「りんごなのにきいろみたい」「あかじゃないね!」と五感を使って認識を深めていた。数日してから固まったものを触ってみると「カチカチ?!」「なんで?」「ジュースじゃなくなってるよ」と液体から個体の変化に気づき驚いていた。縁日会で試食会となり、保護者と子どもたちに提供したが、実際に作ったものはあそびに使用し、購入した同じ味のアイスを提供した。大人の方だけに「子どもたちが作ったことにしてください」と約束し、子どもたちは「わたしたちが作ったアイスだよ」と話していた。活動の内容や作った過程をドキュメンテーションで掲示し、思いを共有した。



5. 振り返り

今回の活動では野菜を育てるところから始まり、観察・推測・実際の体験へとつながっていった。子どもたちはアイスを作る過程で色に注目して自分なりに思いを巡らせていたり、においをかいでどの果物が当ててクイズにしたり、液体から個体への変化を驚き声にして周囲に知らせていた。保育者はシロップ探しや代替えのアイス探しが大変だったが、子どもたちの想いをうけとめ、準備をすすめていた。話し合いの中で代替品となるならば、保護者様に理解していただきながらも子どもたちの思いを実現させるというところで、ドキュメンテーションという手法を使って掲示をした。当日は大人だけ「内緒のお話」という1分で読める紙を準備し、読まれてからアイスの提供となった。子どもたちの思いを壊さないよう共感していただけるように工夫をした。クッキングでは「りんごがあかいろではなかった」ことやジュースのようにふにゃふにゃしていたものがカチカチに固まった様子の変化は子どもたちが「考えてみた」こととは違ったようだが、それをまた学びにつなげ「おもしろい」という好奇心に育てていった活動となった。今後も、子どもたちが自然の仕組みや育み方の中で、自然への興味関心を育める活動を取り入れていきたい。同時に、自分や友だちや保育者や周りの生き物と同じように自然の中で育まれていること。自然を大切にできるような活動へと広げ、命の尊重や自然への感謝の気持ちを育てていきたい。

1. 活動のテーマ、問いを考える

【テーマ】

五感をつかってあそびながら、言葉や表現することを
 楽しもう

【問いを考える】

どんな色があるかな?お湯ってさわるとどうかな?

2. 活動スケジュール

2025年7月~2026年2月

3. 環境設定と探究活動の内容

【環境設定】

お湯、果汁シロップ、たらい、タオル

【探究活動の内容】

お湯あそびを通して、触った感じ、においをかいだ感じ、自分が体験を通してどんな気持ちになるのか?という体感を、探究しながら取り組んでいく。

4. 活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり

夏にあそんだ、水あそびが忘れられず、外は寒いけれど「お水であそびたいな」という子どもの声かから、あったかいお湯なら遊べるのでは?と保育者が考える。また、子どもたちが視覚・嗅覚・聴覚・触覚を使って遊ぶと言葉が促されるのでは?と考え、果汁のシロップを入れて見ることにする。お水ではないシロップに子どもたちは興味を示し「赤」「あまい」「ジュース!」「おいしそう」と様々な声があがっていた。そのままのお湯と、シロップを入れた後の変化を目の当たりにし、「ピンクだ」と色の発語が出てきた。水あそびをイメージしていたようで「あったか〜い」と驚く様子も見られた。「バンシャーン」とお湯をもちあげるようにあそび始めると、周りの子どももパシャパシャと水をたたいたり、すくったりしていた。その手がシロップのにおいになり、一生懸命においをかいで「あまい」と喜んでた。すくった水がピンクなのに手にはピンク色が残らないので「なんでだ?」と考える子もいた。手だけでなく、足も入れてみたりしながら、「あったかい」「あったかい」と言葉で友だちや保育者と想いを共有しながらあそんだ。



5. 振り返り

今回の活動では、水あそびの名残惜しさからあそびが始まり、観察・推測・実際の体験へとつながっていった。子どもたちの興味関心に保育者が耳を傾け、環境構築を試行錯誤しながら、会議での他の保育士の意見等を取り入れながら、行っていった。ただのお湯あそびだけでは発展しないのでは?というところから、シロップを入れることにより、色の変化や予測が始まった。感じたことをすぐに言葉にして周りに広めていったり、その楽しそうな言葉や表情を見て「自分もやりたい」という気持ちを育てていった。水とお湯の違いを知ることにもなり、体験から水→お湯、「あったかい」等言葉で表現できることでさらに学びは深まっていった。手だけでなく足も入れたことにより、子どもたちは体験した水あそびのように、動きが少しずつダイナミックになっていった。遊びや活動の中で自然と「色」に興味をもったり、さわったり、においをかいだり、「言葉」をまねたりすることで「体感したこと」=そのまま「言葉」につながることを、今回の活動で実感した。言葉にした時に、保育者や周りの友だちと一緒に思いを寄せてくれたり、発語を繰り返すことによって、子どもたちの中で自信に変わり、さらに伝えようと自発的に気持ちが目覚めている姿を今回の活動でみるのができた。今後も、自身の想いを声にすることで展開する活動を取り入れていきたい。同時に、保育者が子どもたちの想いを、受け止め、返し、想いを交わす体験を通して、子どもたちの想いを理解する経験を今後も取り入れていきたい。また、自分の思いだけでなく、周りの友だちや保育者の思いも聞いて理解できるように関り、対話する大切につづけるような活動へと広げ、相手への尊重の心を育てていきたい。

1. 活動のテーマ、問いを考える

【テーマ】

自然に触れて自分たちではっぱであそんでみよう

【問いを考える】

はっぱっていろいろな色があるんだね?

はっぱってなんでパリパリしているのかな?

2. 活動スケジュール

2025年9月~2026年1月

3. 環境設定と探究活動の内容

【環境設定】

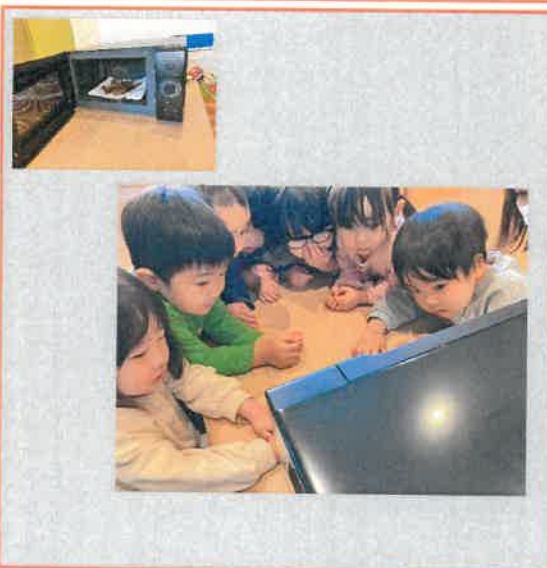
電子レンジ

【探究活動の内容】

葉っぱの観察を通して、自分たちが見ているもの、触っているものは、なぜ違いがあるのか?パリパリした葉っぱはどうやってパリパリになってしまったのかを知り、さらに観察したりあそんで気づきを共有する。

4. 活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり

散歩中に、子どもたちが葉っぱの色の違いや形の違いから、さわってあそぶうちに「どうしてパリパリしているはっぱと、パリパリじゃないはっぱがあるのかな?」という疑問が生まれた。遊んでいた落ち葉を持ち帰り、保育室でじっくり観察を始めた。保育者が再度疑問を共有したところ、「もしかして、おひさまにずっとあたってるからじゃない?」「あついでこと?」と話が膨らみ、子どもたちが「はっぱをあつくしたらどうなるの?」という疑問にたどり着いた。保育者が、熱くなるものになかな?ときいたところ、子どもたちは園にある電子レンジをさし、「これであつたかくしてみよう?」と提案した。気になる葉っぱをレンジに入れたところ、工程をみて「あつかな?」「すぐさわらないほうがいい?」と保育者に話しかけていた。保育者が「きつとあついたら、出てきたら少し待ってね」と伝え、レンジから出した瞬間はおいをかいで楽しんでいた。「くさい!」と思った以上においがしたので、子どもたちは驚いていた。触れるころになり保育者と一緒に触っていくと、「パリパリになった!」「なんかどんどん小さくなっていく」と粉々にして遊んで楽しんでいた。



5. 振り返り

今回の活動では、普段散歩中に何げなく見たり触れる葉っぱに注目をして、観察・推測・実際の体験へとつながっていった。子どもたちは色から興味を持ち、カタチや次第には触った感触の違いに気づいて、さらなる探究心がめばえ、葉っぱを乾燥させる工程にたどり着いていた。保育者が見守りながらも、子どもたちのつぶやきや驚き、発見をクラス内で共有したため、子どもたちの関心が高まっていった。乾燥した葉っぱの作り方を子どもたちはあそびながら学び、「おひさまがあるから」ということで「あついで」と乾燥することに自然と学び、疑問が自分たちで導き出したこと、さらなる遊びの展開として、粉々にして楽しむ遊びにつながっていった。子どもたちは「どうして?」と思ったことに「考えてみる」という学びのサイクルが生まれることを、今回の活動で実感していた。今後も、子どもたちが自然の仕組みや、何かに例えることで創造力が育ち、生まれた疑問を自分たちなりに考えて、「こうかもしれない」と結論を出すような、探究心を深める活動を取り入れていきたい。同時に、自然から、他の命あるものや周りのもの・人が「こうかもしれない」と想像して自分のことのように感じれる思いやりの気持ちを育てていきたい。